

証言



アジア「慰安婦」証言集Ⅱ
— 南・北・在日コリア編 ◆

アクティブ・ミュージアム
「女たちの戦争と平和資料館」 編

西野瑠美子・金 富子 責任編集

中央人文 ☎262-0050

横浜市立図書館



2045001183

未来への記憶
アジア「慰安婦」証言集Ⅱ
南・北・在日コリア編 ◆

「女たちの戦争と平和資料館」
西野瑠美子・金 富子 責任編集



9784750331980



1920336030009

ISBN978-4-7503-3198-0

C0336 ¥3000E

定価(本体3,000円+税)

2013

心の内に埋め込んだ ことを語ろうとする と、私の胸も引き裂 かれる

カシルテユル
姜日出



私は純福音教会の信徒なのよ。私が中国にいるわけではないけど、「神様が」孫たちの勉強するところをちゃんと見守ってくれているから、ちよつと安心していられるんだよね。

やっぱりまた寡婦だし、神様も寡婦の子どもたちにはちゃんと見守ってくれるんじゃないですか。寡婦は同情心も深いし、お金持ち（が教会に）いっぱいお金を持っていったって、そんなに振り向いてくれないよ。私のお祈りにはしつかり応じてくれるんだよ。

今もお祈りするときにたまにこういふんです。親もいっしょに神様のいるところに連れて行ってくださいと。

●末娘——アイゴ、甘えん坊だね。こんなに大きくなってもお姉ちゃんにおんぶしてもらって

二人のうち末っ子だと、母から聞いています。二人兄妹の末っ子だけど、（母が）すごく愛情を注いでくれたの、私に。父のひげが（手でひげのかたちを真似しながら）こんなになるんだよ。そうしたら、母と父といたずらで私に「あんた、お父さんのひげこんなに長いから、行ってひっぱってごらん」というの。で、ひげをつかんでぶらさがったりしたんだよね。そうしたら父は痛い痛いといながら、私を追いかけてくるわけ。でも殴ったりはしなかったよ。私は父にも母にも全然殴られたことなかったもん。

兄ちゃんたちがどこかに出かけて帰ってくるときに、自分の息子たちの分は買ってこなくても、私の分は買ってきたよ。私に通っていた学校は山の向こうにあったの。あの時、雪もたくさん降ってたんだ。今みたいにこんなに暑かったりしないから、雪もたくさん降って、木登りしたりするとずると滑り落ちたの。そうすると姉ちゃんたちがまた負んぶして連れて行ってってくれたよ。

「小学校の同期たちが」初めて私を見てこういったの。「アイゴ、甘えん坊だね。こんなに大きくなってもお姉ちゃんにおんぶしてもらって、そんなに甘えてるのね」。

二年生まで朝鮮語教えてもらったけど、その後は禁止されたし、もう韓国語できないよ。したら（日

*1 一九三八年の第三次教育令施行とともに朝鮮人を皇国臣民化する教育体制がはじまると、朝鮮人初等教育機関は普通学校から小学校に改称され、朝鮮語が事実上禁止された。

1928年慶尚北道尚州^{サンジュ}生まれ。1943年（16歳）家で日本軍「慰安婦」として連行される。安東—新義州をへて長春—牡丹江慰安所へ移動。1945年（18歳）初夏に朝鮮人によって救助。鄂倫春に避難。解放後、吉林市近郊の集安県で朝鮮人と結婚。1946年（19歳）娘出産。すぐ死亡。1949年（22歳）集安県の個人病院で看護士生活。1951年（24歳）吉林市第2病院で看護士生活。1955年（28歳）朝鮮人と再婚。2男1女出産。1988年（61歳）赤十字を通じて韓国訪問。1998年（71歳）韓国訪問後、国籍回復を試みる。2000年（73歳）永久帰国及び国籍回復。2004年（77歳）京畿道広州にあるナムムの家で生活。

本人の先生に) めちゃめちゃにひっぱたかれたんだよ。

私は卒業できなかったけどね。四年生、卒業できないまま行ったの。

● 刀を持った巡査——めちゃくちゃ怖くて犬が震えるように震えてくるし、何が何だかわかつちやいない

里長がとつくに噂流してたよね。「慰安婦」と言わないで「供出」と言ってた。処女供出^{*2}で行くって。最初は私が別の所に隠れてたの。母のお友だちの家にちよつといさせてもらった。末っ子だから母さんのそばでいつも母さんに抱かれて、おっぱいさわりながら寝てたの。だからいられなかったんだよね。ああしていたら母さんに会いたくて泣いたりしたら、その家の人が連絡をしたの。そうしたら帰って来いって。だから帰ってきたんだ。帰ってはきたけど母さんには会ってもない。大人は家になかったの。うちの家がちよつと離れたところにあつたからね。日本人一人と、朝鮮人一人来てた。それで刀を持ったやつ(巡査)が一人来てて、また黄色い服を着た人(軍人)が一人来て、まゝこんな感じかな。怖くて、アイゴー、刀を持った人を見るだけでも怖くてぶるぶる震えて隠れたりしたけどね。あの時は巡査をめちゃくちゃ怖がつてたんですよ。文字一つ投げていったんです。その時、甥っ子一人が引きとめたら甥っ子³をガシツとつかんで後ろに倒したんですよ。……大人もいなかったのに。そしてあの日からもうあんなつちやつた。

兄ちゃんたちは、一人は母が追い出すかのようにしたけど、長男をあの軍隊じゃなくて、あれ、違うやつ(徴用)あつたんですよ。それに行かせようとしたの。次男は軍隊に行けというのを逃げて日本に行ったの。だから無事だったわけよ。こうして二人男が行くことになって、次は私が行くこ

とになるよね⁴。

どこに行くって最初はその人たちが言ってくれなくて、里長がいうには、織物をしたりするところに行くって。布を織るところに。……うちらは何するところなのかも知らなかったの。あの時は小さかつたし、幼かつたし。一六歳になつたとき、一六歳で行つた。

尚州市^{サシジ}内から乗っていったけど、あの時も尚州市内だったんです。車にあれ、何だっけ、荷物乗せるようなところ、そういうところに乗せられて行つたの。ところが、ある女たち具合でも悪いのか、横になつてたの。体も痛いしびつくりしたからそうだったのか分らない。だつたけど、金川から汽車に乗ることになつたんです。そこは席もなく、荷物乗せるところにそんなところに乗せられたの。うちらは逃げていつてからきたんじゃないですか。どつかで隠れてたから。だから待遇が全然悪かつたわけ。だから外でも見ようとしても駄目だつたよね。

おにぎりみたいなものをこうしてもらつて、日本人の大根みたいなもの、こんなのはつかりもらつ

* 2 当時の新聞では「徴用」の同意語として「供出」という用語が使われ、朝鮮民衆は未婚女性の動員を「処女供出」と表現し、「挺身隊」という言葉も使われた。「処女供出」や「挺身隊」は「慰安婦」を指す言葉ではないが、当時の民衆にとっては「徴用」と同意語であった。また「処女供出」を避けるため隠れたり、親は娘を急いで結婚させたりした。尹明淑「日本の軍隊慰安所制度と朝鮮人軍隊慰安婦」明石書店、二〇〇三年、二九七―二九八頁。

◆ 3 連行当時、巡査と軍人が姜日出の名前の書かれた紙を部屋に投げて置いて行つたという。

◆ 4 姜日出は二人の兄がいなかったせいで、自分が代わりに連れて行かれたと思つている。



が行った。

あの中には軍隊がずらり並んでいた。両側に立ってたけど、私は小さかったし言葉も知らなかったから、何処にも出かけられなかったの。言葉でも知ってたらね。また長くいたら出かけたなりしたかもしれないけど。私たちはすぐおびえて死にそうだったし、彼等の顔を見るだけでもびっくりしてひっくり返ったけど、まー、仕方なくこうして暮らした。

食事もなんだっけ。とうもろこしの餅を作ってもらった。あんなので、私たちは始めて食べるからとうもろこし餅がおいしいはずがない。あの白米で、米で作ったのがおいしいんだよね。だから食べても食べた気になれなくて、汁もうすーくて、とうもろこし餅ばかりだった。じゃなかったら、き

びご飯だったり、パサパサしてたの。中国でつくやつ、中国でつくこれをメスス(きびの一種)なの。餅にしてもパサパサするわけ。

そこで何をしたかというと、洗濯をしてあげたんだよ。軍隊の。洗濯もそこで残った人たちといっしょに洗ってあげたりしながらね。軍服みたいなもの。靴下みたいなもの、こんなものをね。私は干すだけだった。(洗濯は)おばさんたちがやりましたね。「おばさんたちが」一〇人くらいいた。

●「慰安婦」生活——めちゃくちゃに裂けて痛かった。切られたから痛いのが当然よ

そうして二〇日間くらいいてから、ハルビンへ、また牧丹江へ行行った。あそこは八月、九月になれば、すぐに雪が降って来るんだよ。

あの時は背も小さく、学生で行ったからね。あのなんというんだっけ。眼の見えない人いるんじゃない。三人を見たの。三人を見てたけどまた一人、また一人と入ってきて、結局四人になってかなり大変だったわけ。私が。そうしたら女性を一人送ってもらって、それで二人で見てたら、また(眼の見えない人が)一人ちよつと先に出て行行ったの……。三人残ったら私一人でやれって。

◆5 長春にある軍部隊の中で一〇〜二〇日ほどいたが、そこで長らく洗濯の仕事をした女性たちは外に出ることが可能だったという。

◆6 姜日出は牧丹江慰安所に到着し、日本軍「慰安婦」として生活する前に、視力を失った日本軍人らを見護した。

●長春——そこではこれといったこともせず、洗濯をしてあげた

最初ちよつと行ってから(中国東北部の)長春に行って、また少し滞在したの。大体二〇日間ちよつとくらいかな。あの時、私といっしょに六人

てて、喉もよく通らなかつたんですよ。すごく怖くて犬みたいに震えてたから、何が何だかよく分らなかつた。お腹すくのも気づかないでお互いに顔をみて泣いてばかりいたの。どこに行くかも知らないまま。そう、あの北韓「北朝鮮」の新義州から安東に。どこに向かっているのか知らなかつたんです。どうにかして状況が把握できないままいて、ちよつと外を覗いてみたら中国人がいたの。我が韓国人じゃなくて中国語が聞えたのよ。

だからご飯(を食べさせるの)も全部して、トイレにも連れて行ってあげて、全部やってあげなきゃいけなかったよ。だから服も全部そうだし、ひどい場合はご飯も食べさせてあげなきゃいけなかった。(眼の見えない患者たちを)日本に送ってから慰安所に入ったわけだ。

解放してから私に「あれ(月経)」があったの。(その前には)無かったから知らない。男と同じ。知らないのー、あんなの。あの時は幼かったし、またあの時の人はずっと小さいじゃない。大人になったの、あの時。大人にもなっていないのが何を知るんですか? 何も知らない。だからいつも悔しい。だから(性器が)入らなくて、まー、だからあの下がうまくいかなかったから痛かったりしたわけ。だからめっちゃくちゃに裂けて痛かった。切られたから、痛いのが当然よ。

だから(性病に)なるかと注射打たれたり、……クーニヨン^{*7}といいます。六〇六号^{*7}を。

また洗う薬をもらったりした。事前に、あれそうしたら(薬で洗ってあげないと)中まで腐ってなかなか治らないもんです。(薬の)色が紫色だった。赤黒い色。

また幼かったし来て間もないから、ちよつと地位の高い人が入ってきた。長くない人は病気が移るかと思つてあまり行かないの。高い人は……あんな病気がかかったら直しくいもんですよ。

来て長い人たち、そんな人たちには高い人は行きません。男はみんな処女と結婚しようとするし、一度結婚している人は嫌がるじゃないですか。処女と結婚したほうがいいって、二度目も三度目もそうでしょう。違いますか? 金持っている人もいっしょ。階級が高ければ好きな通りにできるからね。自分の男といっしょに暮らしても、あれは嫌な時があるんじゃないですか? それが一番大変だったわけ。まー、大変だったんだよ。

私がかこ(頭のとっぺん)を殴られて、すごく長い間髪の毛が生えなかったの。今も鼻血が出るじゃない。……死ぬかと思つたの。顔が真っ青になって。部屋がこんなに小さかった。小さい部屋にバタンと押し倒されて。理由なんてあるかいな。(兵士は)少しでも自分のいうとおりにはしないと殴ったりした。えーとだから、ここから血が出てこんなに腫れたり。顔も腫れたりした。

治療しに病院に行ったら、あの人が階段から降りてきた。なんだ、長官か。(肩を指しながら)ここに星がある人なの。星三つの人で、あの人が殴られたのに、あの人が降りてきたのよ。だから大きな病院には連れて行ってもらえなくて、看護士と医師だけが来るわけ。

あの兵士たちも切符を持つて人だけ接待します。持つてこない接待しないわけ。切符をそこで買わないと入つて来れなかった。あの軍隊のあるところであれを売つてたの。こんなに「列を作つて」並んでも切符がないと他の部屋に入れない。

多くは来てなかった。一番多く来る時は……老いた人八人くらいずつ来るの。一日に。お金なんかは朝鮮人が少しずつくれた。日本人は私を殴つた人が少しくれた。まー、一〇円もあったし、五銭もあったし、穴(□)を手で真似ながら)がこうなつていっているもの。あの時は一〇円でも大金だったよ。

またある時はそう、おいしいもの少し買つてくれたり。誰も「お金を」使うことなんてできない。どこにも出かけられないし。そこに鉄網を全部作つておいて、また幼いし長くないから出させてくれなかったの。老いた人は日本人や長官(将校)といっしょに出かけたりしたけど、私たちは出かけら

*7 性病にかかった「慰安婦」に治療として打たれたサルバルサン注射(六〇六号と呼ばれていた)のこと。

れるとは思っていなかった。

金氏、いつになるかはわからないけどきつと会えるよ。私の中ではいつでも会える気がする。

また腸チフスになった。あの病気にかかってまたこの頭も痛んだりして、すごい高熱が出たの。熱が出たらしょっちゅう水が飲みたくなくて……。眼をつぶって正気じゃない。意識が朦朧として、少し意識が戻ったと思えば、水が飲みたくて死にそうだった。水飲んだら行き返ったような感じ。腸チフスというのは人にかかる病気なの。伝染病で。昔は韓国でもあの病気になると村人が全部死んでしまうよ。死んでいくの。そういう病気だもの。

すごく高熱が出るの。髪の毛が抜ける病気ってね。あの人たち八人くらいかな、車で横になっている人もいたし、座っている人もいて、そう、人を燃やしにいくの。

燃やすってば、火に燃やすのよ。

それで何、穴を掘って薪を入れて揮発油を入れるからほうほうと燃えるの。そういうところに適当に投げるわけ。……私は投げられそうだったけど、最後だったから上にいたの。(病気にかかった人たちを乗せに) 四人が行った。朝鮮人一人と(日本人三人で)。一番上の二人しか生き残れなかった。あの軍隊に朝鮮人が一人いたの。その慰安所にいた男は金氏だけど、彼は独立軍と連絡をとる人だったんだよ。「もうすぐ解放になる。こいつら(日本軍ら)が今はなんだか言ってた。だけど、彼(金氏)は日本人二人を投げ殺したの。投げ殺してもう一人は生きたのか死んだのか……。足でとんと蹴ったけど、生きているのか死んだのか分からん。下にどたと落ちたのを見たの。銃を撃ちまくったりもしたって。それでも私たちは知らん。体が痛くて熱が四〇度まで出てたから。」

だからこの人(金氏)が(ほかの独立軍たちに)連絡したの。そうしたら(連絡をもらってきた独立軍たちが)山の洞窟に私たちをおんぶして運んでいったけど……。私の頭から血がとめどなく出たんですって。まるで銃弾のようにね。

少し治ってから聞いてみたら、何とあったっけ。(金氏は)「あの白頭山^{ベクトウサン}へ行っただけ。長白山なの、白頭山は。「長白山に行ってもうすぐ帰ってくる」と、(看病してくれた独立軍が)私にそういったの。彼がそう言った。もうすぐ解放になったら私のうちに来て、あの私の住んでた尚州に来て暮らすと言ったの。彼が私を、まー、想ってくれたのよ。」

(金氏が)私がいづらをいつでも報復するといったの。報復するといったけど、(あの時は)知らなかったのよ。いったい何を報復するっていうのか。でも今は分かる。

あの人、それで長白山に行つてそれからは会ってない。知らない。いつになるかはわからないけどきつと会えるよ。私の中ではいつでも会える気がする。

あいつら(日本軍)がすごかったの。(独立軍が)日本のやつを殺したから。だから(日本軍を避けて)国境地帯まで行つたわけ。鄂倫春^{オロチン}というところ、あそこ。こんなに手を足を、靴も履かずに歩

◆8 一九四五年当時、牡丹江慰安所の中では腸チフスがはやっていて、日本軍らは感染者を燃やすためにトラックに載せて山に移送していったという。姜日出は、日本軍が移送していった人々を薪の上に投げる過程で、自分を最後に投げたから生き残ることができたという。

◆9 姜日出は、慰安所内に金という姓を持つ朝鮮人軍人が独立軍であることを隠し、慰安所の幹部を装っていたと記憶している。

いて、あの木の皮を剥いて服を作って着たり、そんなところまでいった。あるときは出歩いてみたらこうして山村があつたけど、魚がばちやばちと飛び跳ねてたの。それであの人たち（独立軍たち）が……魚を捕ってきた。それで少しよくなって、なんだっけ、何かを少し運んでたりした。

メモを私の体に隠し入れて、私の体に入れて、そうしてあの離れ小屋にお父さんと子ども一人が住むその家に持つていき、またそこから別のところに持つていたりもした。私たちは約三〜四カ月間こうして運んでた。それをどこに置くのかというと、草取り鎌の柄つてあるでしょう。草取り鎌が、鉞が少し大きいのがあるの。こんなにくぼんだもの、その中に入れておくのよ。

その家に行くとき、鳥をさばいて持つていったら食べた。またそこに薬草みたいなものを入れて、薬草にするように、タオルをかぶって男と薬草取りに行くように、こうして行つてきたりしたの。

三カ月後に、その後に解放（一九四五年八月一五日日本敗戦による朝鮮解放）になったという便りがありました。だから韓国に帰ろうと。あの人たち（独立軍たち）はその上に人々を探さなきゃいけないでしょう。見つかったのかどうかわりません……。吉林では韓国人が多いんでしょう。だから帰り道にそこであつたとまって（遅滞して）また集安県というところまで来たら、川の向こうは北朝鮮なわけ。……そうしてそこまで行つたけどまた暮らせなくて、集安県の七口というところにまた戻つていきました。こうなつたの。

● 最初の夫―道さえ通つたら私を連れて私の故郷に戻つて暮らそうとしたの。すごく心優しい

あの時はカバンも何もなかった。風呂敷に（周りにある服を指しながら）こんなのを少し包んできて。

お金も何も（いくらも）なかったの。そうしてあの時もどこかにしまふところもなかったからチマ（スカート）をはいて、まー、こうしてきたけど、それにお金が少しあつたので……布切れみたいのものに包んで、……こうして（布切れを）枕にして寝てたの。いつ取られたのか、起きてみたら私の風呂敷に包んであつた服や何や何もなくなつてた。お金も一銭もない。だからいっしょに来た人が私をまた売り飛ばしたの。また。

あの、あれ盧氏、盧家というそういう人に。あの家のおばあさんは北韓「北朝鮮」の人。もう北韓の人といつてもあの家には日帝―おばあさんの時から中国に行つて故郷には親戚も知らないし、何も無いって。だから人たちはみんな北韓の人だつたわけ。あの家でお金を払つて私を買つたというの。……あの家で農業をしながら三年、あの家でご飯を食べさせてもらつてた。どういふことか、息子が一人いたの。あの家に。日本のとき、中学校の生徒だつた。日本の学校にいつてた。

あの人は背も高くて見た目もなかなかよかつたの。だから私はあの人に、まー、気があつたわけ。あの人けつこう人がよくて、もう道さえ通つたら私を連れて私の故郷に戻つて暮らそうとしたの。すごく心優しい人だつた。

あの家で結婚したんです。私の男はよくしてくれました。（姑が）私にそうしたら（意地悪したら）嫌がつて、姑と息子と喧嘩したりしましたの。そうだつたんです。ご飯を炊いてたけど、ご飯のなべが

◆ 10 中国東北黒龍江付近の山林地域に位置する。

◆ 11 姜日出は盧家で農業を営んで暮らし、盧氏の長男と結婚した。

沸騰してきたから人を呼びにいけないじゃないですか。(舅が) お酒を飲みながらドアを開けて「お前、オマニ^{ママ}連れてきて」(姑を) オマニ^{ママ}というの。あの平安道の人は。「お前、オマニ^{ママ}連れてこないのか、連れてこないのか」とした。なんだっけ。あの日本人の靴(軍靴)、あれをもって隅でご飯を炊いていた、火おこしをしていた(私に軍靴を) 持ち上げて呼びにいかないからって私を殴って。その時に歯がばきと折れてしまった。だから口が(唇を前に出しながら) こうなっちゃったの。それで男が、どこかに出かけてもどってきたとき私を見て、「君、歯がなんでこんなに鳥のくちばしになっちゃったの」といった。それでお母さんを連れてこいというのをすぐに行かなくてこうなっちゃった。ご飯が沸騰しているのにそれを火にかけたままどうやっていけるの。だから行かないと。連れてこなかったといったらこうなっちゃったわけ。「早く行け、本家に行け、本家に行け」。あの本家が隣にあった。行けというの。だからご飯も食卓も支度できないまま何度も行けというからいっただす。そうしたらあのお母さん(姑) が息子をおんぶしていた。あの時姑は三〇何歳だったんです。若かったから子どもをおんぶしていたら「人をあの靴であんなことをしてあれ見てみなさい。村人「たちが」何というだろう。親の自分をやるならちゃんとしてくれなさいと。あの人ここには親戚も全然いないのに。自分の子どもよりもよくしてあげなさい家がうまくいかないのに、どうしてこんなことしたのか」といいながら自分の父にとりかかったら、お母さんが「このケセッキ(犬畜生の意)」、平安道の言葉はケセッキというんです。「このケセッキやろう、お酒飲んだ人にこんな口の利き方は何なんだ」と。耳元に血も乾いてない(『青二歳の意) 年も若いのが自分の嫁にああしたって。

秋にもなっていない頃、七月にあの人が軍隊に行くことになったんです。行かなきゃならなかった

んです。そこでは、蒋介石と共産党と戦ったの¹²。解放になって、また中国で共産党と、あの台湾と戦うようになったでしょう。あそこに行って死んだんです。

子ども(最初の夫との間で生まれた子ども) が病気になるって、そこから(その時) 我が子は注射一本だけ三、四本だけ打ってもらっても肺炎で死ななかつたよ。麻疹から肺炎になったからね。だから死んだんだ。子どもが病気になるに病院にも行かせてもらえなかつた。お金もくれないで。だから子どもが死んだときにアイスクリーム一つも買ってあげられなかつたんだ。私にお金がないから。死ぬそばでも子どもが死ぬのか、死なないのか、若かつたから分らなかつたんだ。(姑は) 実家が同じ村だったから、実家に行つて暗くなつても帰つてこないの。私もご飯も作らないで(看病していた)。子どもが病気だからね。

キリキリと歯軋りをしたんです。子どもが。そうして眼をそつとつぶった。死んだのを私が布団をかぶせてあげた。そうしたら、姑が自分の子どもをおんぶして入ってきたながら、「子どもはどうなつたかい?」と。私は黙つてた。舅もそのときいっしょに入ってきた。

●看護士——中国人、あの大きな病院に行つて眼を治すところにした

里長が「あなた、この家にいたら死ぬよ。働くばかりで夏には靴もなく裸足で歩いているし」といった。私、とても苦勞したんです。そうしたら、ここで言うなんだっけ……、里長が「私がどこか紹

介してあげるよ。小さな病院だけど吉林市に私の親戚がやっている病院がある」と言ったの。あそこに行つてこうしてたら、注射も初めて打つたけど、全部できたのよ。あの人（牡丹江慰安所で眼の見えない人たちを治療していた医師）がやってくるのを見たからね。個人病院に少しいてから、大きな病院である時人手が足りなかつたので、大きな病院に行つた。中国人、あの大きな病院に行つて眼を治すところにいた。眼を見るところにいてから、次は歯科に。あそこは大きな病院だけど歯科もあつた病院なの。私の病院が第二病院なの。中国の吉林市で。医師が来なければ私が病気を全部看てた。そう、眼科に主任……眼を看る主任が一人、また耳を看る主任が一人、歯科に主任が一人なの。その主任が私たちの歯科にきたけど、歯も抜けないし、治療もできない。しかし私は見よう見真似で全部抜いたり、どこか痛いといえは何かの薬を塗つてあげたりした。

卒業したばかりの人たちが私と一年間いっしょにいながら、歯を抜こうとして痛いのを抜かなきゃいけないのに、痛くないのを抜いたらしいの。そうしたら主任もこれを処理できずにいたけど、私が主任に知らせないで処理したんです。

患者に「私のためにでも少し我慢してくれ。この人は若いし将来がある人じゃない。いいこととしてあげれば次代まで続くよ」といったの。そうしたら眼をつぶつてくれて、まー、こんなにお金は払わなかつたけどね。私を見てでも私のことのように思つてくれと、私によくしてくれたの、あの医師が。看護長だから、彼らより（地位が）高いわけ。階級的に。内科に主任医師がいたの。あの人たちより私の方がお金をもつともらつた。大学生があの内科の主任になった。領導（指導者のことと推測される）は能力が少しなくてはならん。仕事だけうまくてもまた駄目なの。言葉もうまくなきゃならんし、

またちよつとこうしなきゃ駄目なんだよ。

子どもをおんぶして通つてたし、二人の手をとつて歩いて、氷に滑つてころびながら歩いた。すごく遠いんです。車も三人か、四人で登れないんです。車はこんなのが一台なわけ。来たら男たちが前を競つて登っていくの。だから私は人よりけつこう大変だつたんです。他の人が五時半に行けばいいとしたら、私は五時にはそこに着いていなきゃいけなかつたんです。

山に行つても私に子どもたちがいたし、お乳を時間とおりに飲ませるんでしよう。お乳を飲ませるために子どもをおんぶしていくんです。また小さいのを連れて行つて、彼ら（いっしょに働いた看護士たち）は子どもをみて、私は薬剤をしていた。

私が病院にいて、私の娘が私の代わりに入つた。「娘は」一九歳くらいになつてた。¹³幹部が親の代わりに子どもは入れないと言つたから、具合が悪いといつて、娘を病院に入れるために私が出で行つたの。そうしなかつたらたぶん三、四年はもつといなきゃいけなかつた。

自分の子どものためには仕方なくて、私が出でいったの。仕事もなく、あちこちまわつて悪い人にひつかつたらどうする。だから私が自分の仕事をあげたの。

私はそれさえなかつたらお金の級数が多いからけつこう儲かつたんだ。

◆13 姜日出は看護士として在職していた際、再婚して一女二男を産んだ。

◆14 姜日出は一九四九年から娘が一九歳になる一九八〇年まで病院で働いたと推定されるが、自分の代わりに娘を就職させるために、意図的に退職を申し出た。

●裏切り——私をあなたに裏切つて、こんなの私は許せません

あの病院で、あれなんだっけ、薬局にいる女が紹介した（二人目の夫は）韓国人。あの人も両親がいなくて、他人の家で育つたつて。うちの夫、すごく男前だったよ。金日成の画像見たことないでしょう。あの人より齒並びがよくて、大きく笑うと、みんなかっこいいと言つてたよ。見る人みんなきれいだと言つてた。

だけど、これがね、かっこいい男こそ駄目なのよ。（あの女は）ふしだらな女、（二人目の夫も）ふしだらな男。みんな同じ。お金を稼いでも持つてきてくれないし、自分たちだけでご飯食べにいったり遊びにいったりしてたの。だから私はすごく寂しかった。お酒ばかり飲んで友だちばかり気をつかつて。どこへ行こうとも私よりましな女ならそれでもよかつたけど、背も小さいし顔も真つ黒で、こんな女を連れ歩きやつてた。

「女を見るのはいいけど、お金だけ持つてきてもらえば大丈夫。あそこに行つて暮らした。私は子どもが三人もいるから、その子たち勉強させなきゃいけないの。出て行け」。こういつても出ていかないで、あそこについて泊まつては五、六時くらいになつて家に帰つてくるわけ。

結婚式を挙げてお腹に子どもができた。一年半ぶりにまた弟ができたのよ、弟が。そうしたら、あの女「子ども」はうちの子どもと同じ年だけど、うちの子は七月生まれで、彼女の子は冬至に生まれました。男の子二人が一年にできたわけよ。だからまーね。それでも息子がきたら直すのかなと思つたら、直さないんです。だから最後には離婚したんです。離婚してくれというからしてあげたの。

まったく、今、夢でも見たくないです。私をあなたに裏切つて、こんなの私は許せません。私は男にこんなことされても生き抜いた。また最初、夫の実家であんなことされても私は生き抜いて、また生きていく道を見つけたの。だから一人でいるときが一番楽。

●帰国——ここにきて土を持つて中国まで戻りました。必ず韓国の土を持ち歩いたんです

お正月や名節の時には、八月の秋夕「お盆」と正月には子どもたちが見えないところで涙をたくさん流したよ。ま、息子が見ているところでは流せないのでしょ。いつも涙が出るんだよ。だから、私は一二人兄弟の末っ子だからすごく可愛がつてもらつたの。あの時は服を作る布の絹売りの人が来りした。そうしたら黄色いチョゴリに真つ赤な、あれなんだっけ、端に真つ赤なもの、そうそう、チマチョゴリを新しく作つてもらつたり、お正月にはまたもう一度やつてもらつた。そうしながら、お母さんが、私は物心がついていたから全部覚えてるけど、私をおんぶして、兄ちゃん、姉ちゃんたちはみんな縫いものをしてたの。満月の時にね。満月はまんまるでしょう。その時はこんな記憶が思い出して、私が一人でいた時にはよく泣いたりしたの。

八八年に一度来たよ。あの時は香港を経た。ここに（韓国に）（直接）来られなくて、赤十字から訪問の提案があつて。私の戸籍があるんじゃない。赤十字に離散家族のようによつてもらつて、それで元氣付けられて来れるようになった。

どうやつて来たのかというと、中国の広州というところと、深圳¹⁶というところと、その向かい側に香港があるんでしょ。香港からこう回つて来たんです。あの時も、……ソウルにいる母方の姪・甥

が迎えに来てくれた。

あの時、来たときにも兄ちゃんもいないし、親もみんな亡くなって、どんなに泣いたことか。空港であんなに泣くのは初めてみたって。それでも、ここにきて、中国人だから中国に行けといわれたの。……まったく。そのことを思い出すと、今でも胸が痛くなる。

ここにきて土を持って中国まで戻りました。私は、必ず韓国の土を持ち歩いたんです。九八年だって。その時ここに來てからまた帰っていった。私も中国では食べていけるから、だからまた帰っていった。新聞にも出ました。私が話したんじゃない、私の同期が話したの。私と同じクラスだった同期が。そうしてここまで來たから知らせるのがいいと思って「もうとっくに年も取ったし、知らせていいだろう。あなたがまた嫁にいくこともないだろうし」と言っただけ。

放送局に「慰安婦として連れていかれた」といったら、新聞社から人が來たの。人が一人きて新聞に出たよ。ほら。土地を、三千万ウォンの保証がないと、この戸籍に入れてもらえないんです。あれ、なんだっけ。父方の姪／甥に頼んだら、分家ではやってくれるといったけど、本家が駄目だったんです。イモ（親戚のおばさん・実母の姉妹のこと）が、「私がやってあげるから心配しないでね。この人（母方の姪・甥）と自分と二人でやるから」って。

そうしたら涙が豪雨のように流れてきた。というのは、私は、（上の）兄ちゃんが稼いで土地を買ったならば絶対何もいけません。そんなに気が回らない人じゃないんです、私は。けど、全部うちの親が、骨が折れるくらい苦勞して働いて。この家に、姜家に嫁に來たときには母がほんとうに食器一つなくてひさごに入れて食べてたのに……。こんなことを考えてたらお母さんのことを思い出して、

すごく泣いたんです。泣きました。

●恨——韓国政府はどっしてこうするのか、わからないよ。えー？

「従軍」（と言っちゃ）駄目です。「従軍慰安婦」というのは間違い。「慰安婦」といわんとならん。「従軍慰安婦」は自分の足でついて行つたの。金稼ぎにいったわけ。我々は強制的に無理やり連れていかれた。そう……。こんなふうには無理やり強制的に連れて行かれたのは「慰安婦」なの。だからああ言っちゃいけません。

私は、力が尽きるまでがんばって、この問題を我々が生きている間に正しく解決してから、死ぬなら死ぬよ。……国を考えなきゃいけない。我々は苦勞して。本当に火の地獄にまで行ってきた人なの。私は。我々の子孫には絶対こんなことさせない。

◆15 一九九二年、中国の国交樹立以前においては旅行自由化が成されておらず、韓国訪問に制限があった。これに対し、姜日出は大韓赤十字社の行う海外同胞母国訪問事業の一環で、一九八八年の姪・甥たちの要請によって韓国を訪問した。

◆16 広州、深圳は、香港との国境地域に位置し、行政区域上においては広東省に属す。

◆17 姜日出は一九八八年の韓国訪問当時、国籍が回復されていなかったため、三カ月の滞留期間のみ韓国に滞在することができた。

◆18 一九九八年の韓国訪問当時、姜日出は小学校時代の同期生に会ったが、その同期生が情報を提供したことで国籍回復に対する願いが朝鮮日報で記事になった。（中国居住の金マルスンハルモニ慰安婦過去告白「朝鮮日報」一九九八年、四月九日付参照）

私はうまく話せるわけではないが、一言でも二言でも、こうして実際に「経験した」ことは話すんだ。自分の家はなくてもいいけど、我が国、我が親が埋まっています、祖先たちが埋まっている国を、外国の人にまた奪われるもんか。一言でいえば、だから私は出てきたのよ。……私は何をしてでもこの国を、一言（の謝罪）でも私が実現できるように、日本のやつらと外国のやつらを二度と来させないために、私は出てきた。本当よ。

韓国の国を永遠に我々の子孫が守っていかなくちゃならん。私は、一言でも、一人でも聞いてくれれば、私は神様に本当に感謝するよ。我が国を守る人が一人でもいればいいの。私も我が子に本当に会いたいんだ。ほんとうに。電話をしたら胸が焦がれて眠ることさえできなかったりするの。だけど、これは小さい私の家庭であって、国がなければ私もない。国がなければこの世に生まれて何の楽しみがあるのか。

私は来月¹⁹には中国に行くんだ。……今初めて行くんですよ。ドキドキしませんよ。家に帰るだけだから。我が家に帰るだけ。息子の家でもなく私の家ですもん。

私は、功勳が多いじゃない。働いて三〇年近くだから、だから家をつもらったの。吉林市の中であつこういいところにあるよ。……吉林市で一番大通りがあるけど、私の家の前にね。……解放路というの。だけど、うちの息子、娘が、私が暮らしているところにいっしょに、そばにいてほしいよ。私が生きている間だけでもいっしょにいられば、死ぬ時眼をつぶれるよ。……血の混ざった人と死ぬときにいっしょにいられないのが、これがやっぱりハン（恨）なんです、私にとっては。……うちの娘にもお金は少しあります。だから長男には私が少し手伝って。自分が何とかすれば、まー、政府

に駄目とは言われないだろうし。

この政府のために息子・娘を置いてきて、私はここに出てきているの。なのに、韓国政府はどうしてこうするのかわからないよ。えー。

だからこのことをどうすれば、あの女性部にいつてどうすればいいんですか？

（整理…オ・ヨンジュ／翻訳…ベ・ヨンミ、補注…金富子／出典…韓国挺対協「証言集VI」）

◆19 姜日出は二〇〇二年二月、中国に行つて二カ月あまり滞在してきた。

《整理者の補足》姜日出の「祖国のために」

二〇〇二年六月、姜日出ハルモニとの最初の出会いは、晴れ晴れしいピクニックで始まった。韓国挺身隊問題対策協議会（以下、挺対協）で被害者福祉事業の一環として行われた安眠島ピクニックは、被害者という言葉の持つ重い感じとは違い、おしゃべりで花が咲くのんびりとした遠足だった。ハルモニたちはみんな個性溢れた話し方で歌や冗談話、昔の経験談を一気に吐き出した。姜日出ハルモニも幼い時の思い出から、韓国に帰国した当時の悔しさ、現在のナムムの家での生活、さらには慰安所内で起こった暴力の経験まで絶え間なく話していた。二日間の旅行はハルモニたちにとって、ピクニック以上の意味を持つように思われた。みんな一人一人が生きてきた人生は異なっても、ハルモニたちは日本軍「慰安婦」であつたという共通した経験を持っている。そして、ハルモニのピクニックは子どもたちに、親戚に、もしくは近所の人々に「慰安婦」であることを隠せねば

ならなかった息を潜んでの日常から離れて、短い間ではあるが不安感を取っ払う空間だったのである。そのおかげで、ハルモニたちは部屋のドアを閉める必要もなく、隣に誰がいるかを見る必要もなく、たくさんの話を持ち出したし、姜日出ハルモニもやはり経験談を話し始めた。

このようなハルモニの積極的な態度は、インタビュを承諾してくれなかったり、承諾はしてくれても大部分を沈黙で一貫するかもしれないと思った、私の心配を減らしてくれた。インタビュに先んじて親しくなる過程として、ハルモニといっしょにピクニックに行ったのは、けっこうよい経験だった。

ピクニックの後、水曜デモのとき二―三回にかけてハルモニに会ってからは、二〇〇二年七月には公式的にインタビュをお願いしようと、京畿道広州にあるナムムの家を訪れた。ハルモニは故郷の慶北尚州とソウルに親戚が住んでいるが、二〇〇〇年、中国から永久帰国してからは「ナムムの家」で生活している。健康上でも金銭上でも親戚の力を借りるのはまだ必要ないと思ったからである。

ナムムの家はハルモニの生活に不便がないよう、施設が整ってはいるが、ハルモニは時々不満を口にしたりした。もつとも大きな不満は宗教的なものであるが、ハルモニは真面目なキリスト教徒であるのに、ナムムの家は仏教系が運営しているためである。ハルモニは「ハナムム（キリストのこと）が私に勝ち抜かせるためにここへ送ったの」といい、ハナムムに対する信仰を守るために、自分自身と「一生懸命闘っている」と話した。そして、ハルモニのこの言葉は、ナムムの家の家族との間に小さなもめ事として現れたりもした。ハルモニはやはり宗教が異なるため気にかかるといながらも、それでも毎週日曜日の朝には近所の教会に欠かさず通っている。

ナムムの家を静かに見て回った後、控えめに出したインタビュのお願いに對し、ハルモニは断

固と断った。ピクニックと水曜デモでの出会いを通じて積み重ねてきた親しさへの信頼が崩れ落ちる瞬間だった。ハルモニはピクニック中ずっと「私があるに故郷にいる甥の息子を紹介してあげよう」としながらいっしょに写真を撮ろうとし、初めてナムムの家を訪れた時にも「この子、私と仲いいのよ」と紹介してくれたが、このような仲良さが直ちにインタビュ承諾を意味するわけではなかったのである。むしろ、インタビュ前における仲良さが邪魔になったわけだが、甥の息子の嫁候補としてばかり考えていた学生が、いつの間にかインタビュを頼んできたことに、ハルモニも戸惑ったのかもしれない。しかし、私はインタビュを断られてからも、一月間ずっと電話や水曜デモで会いながら頼み続けた。そうしたら、ハルモニは「分つたよ。私に聞きたい話って何？」とし、話をするのを嫌がっていたあの「歴史」をやがて語りだしてくれた。

ハルモニの話はよくまとまったメモを順番通り読んでいくかのように、空間の移動が比較的正確だった。幼いころ、連行の状況、長春、牡丹江、集安県、看護士時代、帰国情況へとつながる前の編集本の内容は、ハルモニの話す順番その通りであり、記憶の範囲もまたぶれがなかった。インタビュの準備過程として、ハルモニを訪問する前に読んだ挺身隊研究所による一九九八年のインタビュ内容と比べ、大きく開くところも、大きく加わるところもなく、わりと正確な記憶力で一貫した。ハルモニは四度にわたるインタビュの間、ほぼ類似した枠をくり返し、そのおかげでもつれている記憶を整理するという負担は減らすことができた。しかし、一方ではハルモニの定型化された記憶からいかにして抜け出せるのか、そしてその前にハルモニの記憶がどうしてこのように定型化してしまったのかを悩むようになった。

上記の挺身隊研究所のインタビュは、ハルモニが永久帰国する前に行ったものである。すなわち、中国で生活していた間、「慰安婦」であったことを明かすことのなかったハルモニに、そのイ

インタビュアーはほぼ口述の経験のない状態で行われたものなのである。そうすれば、ハルモニは私とのインタビュアー以前に記憶の枠を整えておいたのか？ ハルモニは四度のインタビュアーを続ける中、自分のように「歴史」をうまく話せる人はいなからうとした。ハルモニのいう「歴史」とは、人生の半分以上を占めてしまった「慰安婦」としての人生のみであり、ハルモニはそれだけが面接者の聞こうとする内容であるかのように考えているようだった。そうであるなら、ハルモニの記憶がそれまでのインタビュアー経験を通じて定型化したものではなからうか。ハルモニの人生において大事な部分を、自ら整理したわけではなく、数回のインタビュアーを経る中で編集されたものではなからうか。ハルモニの固定された記憶の枠は、「あなたたちがこれまで聞きたかったのはこんな話なんじゃないの？」という反問のように思われた。

ハルモニの定型化したインタビュアーの流れを変えるためには、やむを得ず質問を投げかけるしかなかった。質問には事実に基づく経験を聞くのではなく、ハルモニの全体的な考えを問うもの、あるいはハルモニの感情の状態を聞き内容を盛り込むことに決めた。たとえば、ハルモニの結婚生活に関して聞く際には、いつ、どんな人とどのように出会って結婚したのか、と詳細に聞くのではなく、「ハルモニの結婚はどんなものだと考えますか？」という包括的な質問をした。または、看護士時代の経験を聞く際、「看護士をしながらやりがいを感じたときってありましたか？」と聞き、ハルモニの当時の感情を聞く質問をした。ハルモニは、結婚は必ずするべきであるが、「顔のハンサムな人」は避けるべきであるとし、再婚した夫の浮気話を持ち出した。看護士としての生活を語りながら、人はたくさん助けたが、「娘が死んだ。お金もなく何もなかったから、ちよつと治療できなくて死んだのがある」としながら、助けることのできなかつた初子を想ったりもした。

ハルモニはインタビュアー時間の大半を現在の生活にかかわる不満で埋めた。解決の兆しの見えない

い日本政府の謝罪と補償問題、ナムムの家で他のハルモニたちと生活しながら起こりうる葛藤、「慰安婦」問題解決と被害者であるハルモニたちの福祉に無関心のように見える国会と女性部の態度が、ハルモニの主な不満だった。ハルモニの個人的な望みは、中国で暮らしている息子・娘夫婦と、韓国に住んでいるが離れている末の息子といっしょに暮らせる家がほしいということ、たった一つなのである。ハルモニの話の中で、同じ不満と要求が繰り返される時には、適当に他の内容へと誘導するために質問をしたりもした。しかし、ハルモニは質問と関係なく語り続け、前に座っている私以外にも、挺対協の誰か、もしくは女性部の誰かがインタビュアーを聞いているかのように、マイクを通じてこのような要求と不満を語り続けていた。

ハルモニの不満と要求は別個に分離されているものではなかった。ハルモニは、政府がもっと関心を寄せて早く補償を受けられることを望んでおり、補償というのはいち、息子・娘たちといっしょに暮らせる家がほしいということの意味する。また、ナムムの家で起こっているさまざまな葛藤を吐き出しながら、暮らせる家さえあれば出ていきたいと話したが、それはハルモニ一人で生活する家ではなく、息子・娘たちといっしょに暮らせるくらいの家のことであった。ハルモニは二〇〇二年の夏、一人で暮らすには狭くない賃貸アパートを見つけていたが、家が広くないとして契約はしなかった。ハルモニの現在の不満と葛藤は、ある要求をするための一種の前提条件となっているわけである。

ハルモニはインタビュアー中、終始「祖国のために」、「子孫のために」という言葉をよく使っていた。ハルモニは、「慰安婦」だった事実を明かし、その経験を語るのが即ち、国家の利益となると考え、さらに自分の話を「歴史」と呼びながらその持つ価値を強調した。そして、その「歴史」を語ることによって、子孫たちが過去の事実を正しく理解さえすれば、如何なる物質的な補償も要ら

ないという。しかし、息子・娘たちといっしょに暮らせないことに対する不満をいうときには、心地の良かった中国での生活を捨て、南韓（韓国）を選んだ自分になぜ、物質的な補償が与えられないのかと、残念な気持ちを表わしたりもした。ハルモニは、「祖国」のために失った幼いときの幸せを、「祖国」に帰ってくることによって再び失わざるを得なかった中国における社会的地位を、今は補償してほしいと望んでいるのである。

（オ・ヨンジュ）

11 逃亡の懲らしめに、体を火で焼かれた

イジョンニョ
李宗女



● 区長にだまされて

五人兄妹の長女として生まれた私は、家があまりにも苦しくて学校にも行けず、幼いころから両親を手伝って畑仕事をしなければなりませんでした。一七歳のときに婚約したのですが、結婚できませんでした。婚約者が徴用で引つ張られました。二十歳になるまで待つていたけれど、彼は帰ってこなかったのです。

一九四三年七月のこと、村の区長が家に訪ねてきて、生活が苦しいのだから仁川に行つてゴム工場で働けばお金をたくさん稼げるから私を行かせると、父をだましたのです。何も知らない父と私は、お金をたくさん稼げるという言葉に引き付けられ、承諾してしまいました。

そのとき村からは、私を含む五人が区長にだまされてついて行きました。ソウ

1922年、黄海北道金川郡金川^{クムチオン}邑で生まれる。1943年7月に、村の区長から仁川にある工場に出稼ぎに行こうと言われソウルに連れて行かれた。そこで日本軍に引き渡され、「慰安婦」にされた。2年間「慰安婦」生活を強要されたが、祖国が解放されて自由になった。